

に、信頼性、透明性を世の中は求めている。

- ・ヒューマンセントリックは一社では提供できない。産学連携、産産連携、ベンチャーも含めて強みを持ち寄り、エコシステムを作ることが必要、というビジネスのパラダイムシフトが起こっている。そのためには目的志向、共通善、「何のためにお客様にこれを提供するのか」ということが重要になる。
- ・将来のビジョンを信頼するかどうか、という調査では約7割がイエス。ビジネスリーダーの大きな社会的目標に対する回答は、軒並み高いパーセンテージで肯定的である。SDGsを組み込んだビジネスリーダーの方が成果を上げたという結果もあり、目的志向のビジネスの重要性を示している。
- ・同様に組織作りにおけるワークライフバランス、オープンイノベーションのエコシステムといった、ヒューマンセントリックな目的志向を採用したビジネスリーダーの方が成果を上げている。
- ・デジタル・トランスフォーメーションへの進行状況における最大の課題は人材が居ないこと。計画段階と実行段階で必要な人材も違う。
- ・その人材育成に必要な考えは、「イノベーション＝人」、即ち発想力や共感等であるということ。最も必要なことは、正しい質問を投げかけ、正しく答えることである。何のためにやるのか、という一番大きな問いを突き詰めることが本質を見極めることとなり、哲学の領域となる。デジタルの時代だからこそ、人がやることが重要となっている。
- ・自分一人では何もできない。多様な人と一緒に、同じ目的に向かってやっていくことが重要。その中でデザイン志向のアプローチが有効になってくる。「オープンイノベーション＝イノベーションのための共創を起こす場の提供を行うということ」である。
- ・アメリカのオープンイノベーションゲイトウェイ（OIG）を運営している方から日本の強み・弱みを分析してもらった。強みの一つに茶道・武道の「守・破・離」が挙げられていて、これを教育に活かしてはどうか。具体的には「wise action」に基づいて学んでいくと良い。「守」は分かっていることをちゃんと学ぶ。「破」は過去に学びつつも自分の道を作っていく。「離」はそこから離れることでイノベーションが生まれる、ということである。これにより、wiseな個人が増え、wiseな組織が増え、wiseな国家になっていく。
- ・今の若者は入社2年目で6割が会社を辞めたいと思っている。このような若者たちをいかに活かして企業・産業界を発展させていくかは、我々大人のミッションと考える。

4. パネル討論

ファシリテーター：小林傳司（日本学術会議第一部会員、大阪大学理事・副学長）

パネリスト：モンテ・カセム（前掲）、平田オリザ（前掲）、梶原ゆみ子（前掲）、

白木夏子（HASUNA 代表取締役）、

迫田雷蔵（日本経済団体連合会教育問題委員会企画委員、株式会社日立アカデミー代表取締役社長）、

松尾泰樹（文部科学省科学技術・学術政策局長）

（本項、敬称略）

小林 先ずは本パネルからご参加の迫田氏、白木氏、松尾氏から自己紹介を兼ねたコメントをお願いしたい。

迫田 デジタル時代にどうやって人材育成をしていくのか。経団連では産学で人材育成の委員会をやっているが、相当な誤解がお互いにあるなという実感があり、ようやく表に出て議論できるようになったと感じている。

本日の講演は大変勉強になった。カセム先生の話では、大学の可能性は相当あると感じた。

平田先生の地方をどう考えるかについて、国公立と私学の間には差があり、中でも地域間に差があり、大学は必ずしも一本ではない。率直な意見を出さなければ解決策が出てこないだろうと感じ、今日のお話はヒントを頂けた。

梶原先生には、産業界を代表してご講演頂いてありがたいと思っている。

白木 株式会社 HASUNA の代表をやっている。ジュエリーブランドで、27歳で起業したもの。

大学時代に貧困問題を研究し、当初は国連職員になりたかった。後に南インドの NGO にインターンした際、アウトカーストの皆さん、つまりモノづくりの末端である貴金属業界の末端の鉱山労働者を目にした。そこで見た経験が今の起業に繋がっている。

貴金属の経済力となる金、石、レアメタルがアウトカーストから来ている現実がある。一日1ドル2ドルの賃金で、子供も学校に通えないような労働環境があり、これをビジネスで何とかできないかと考え、起業した。身に着ける人も現地に居る人も笑顔になれるようなブランドを作りたい。そのため現地に自分やスタッフが行って、児童労働が無いか、森林破壊、水質汚染が無いか等をチェックしている。直接行けない時は国際認証を取っている鉱山などと取引し、安全・安心なジュエリーを提供している。小さなベンチャー企業でも、大学で学ぶことや大学のデータは求めている。新興国の貧困層で何が行われているか、業界を変えていくためのデータは大学を頼りにした。そういうことがもっと進めばいいと思っている。

若い人材は重要と考えており、インターンの学生を受け入れている。当社にインターンをした後は、目を輝かせて起業を望む学生が多い。

松尾 現在は科学技術政策を担当しているが、前職は高等教育局にもいた。また、就職協定時は学生課長でもあった。

学生が減っている中で進学率が上がっている。この結果、多様な方が大学に居り、大学のやることは大変になっている。このため、色々なところとの連携がマストになる。また、文理を脱却して様々なことをやっていかなければならない。では何をしていくか。卓越大学院を作ったり、情報教育を初等中等教育から導入したりしている。学生をどう教育していくか。学生は非常に真面目でとても勉強している。今の学生は変わっており、企業の人事部長にはその学生の強みを理解して欲しい。学生にワクワク感を与えるため、産学のプロジェクトに参加してもらいたいと思って動いている。「とびたて JAPAN!」の留学生プロジェクトでは、外国に行って戻ってきた学生は目の色が違う。気づき・ワクワク感を学生に提供できれば嬉しい。

地方の人材不足については、東京に行って戻る流動化や IoT で遠くでも仕事ができる仕組み等が重要である。また、そのようなことを可能にする学生プラスαの大学教育が必要である。

起業と大学の在り方については、近年、企業の中央研究所が縮小し、その役割を大学に求めている。それが大学と産業界、そして若い世代のモチベーションになれば良いと思う。

小林 迫田氏、先ほどのお話の中で産学で誤解があったとは？

迫田 産業界も一枚岩ではない。人材のイメージが各企業で違い、古い人材を求める企業もある。これはグローバル化とデジタルディストラクションの浸透具合で変わってくる。このため、バラバラのメッセージを社会・大学に発してしまっている。

小林 カセム氏は、大学は不条理を受け入れる余地が必要ではと講演された。最近は一ショット型研究の意識も出てきている。このような中で、大学が適切に不真面目な要素を回復するのには何が必要か。

カセム 「正しく不真面目」というより、「楽しく真面目」が必要。発想を何かに向けて誘導し、志の高い目標に向ければいい。それが指導教官の役割ではないか。

平田 2013年の高校演劇大会では不条理演劇が多かった。これは高校生たちが東日本大震災を経験して、生き残った理由が何も無かったことによる。当時の学生は非常に優秀である。それは、自分たちが生き残った根拠が何も無いと感じていたから。これは学問にとって非常に重要なことである。それを受け入れてニヒリズムに陥らないためにはどうすればいいかが重要。課題に対して絶望するのではなく、絶望から出発しなければならない。これを経験するための一つの役割が芸術であり、だからこそリベラルアーツで芸術は大きな位置を占めている。

私が卒業した ICU（国際基督教大学）は非常に勉強させられるが、遊びと両立は可能であった。課題はシステムをどうするか。学生をどう自立させていくか。現在は高校間の格差が広がっていて、育ってきた環境も違う。大人との接触の機会もまるで違う。コミュニケーションは慣れるのが重要である。ところが優秀な学校はアルバイト禁止でその機会を奪っている。このような様々なマダラ状の学生が一気に大学に入ってくる。これでは初年度教育は難しく、少人数でないと無理である。発達障害の子をどうするかという課題もある。大学が文科省の指導でアクティブラーニング化すると、発達障害が顕在化する。このような多様性に私たちの場がどう応えるか。

小林 生き残った根拠がないのは非常に深刻。2011年の震災を経験した学生は、相当意識を変えた状態で社会に出てくると思うので、注目に値すると考える。

梶原 不条理を言うときに、インクルーシブカルチャーを活用出来るのではないか。失敗を活かし、試行錯誤しながら次のステップに行くことが重要。そのためには個人と組織の両輪で変わらなければならない。
発達障害は企業の中にもいる。ダイバーシティを受け入れ、様々な属性をお互いに尊敬しあいながら仕事できることが重要。

小林 産業界にどんな悩みがあるかを聞かせて頂いて、大学とはそう遠くないと感じた。方向付けや志、「何のために？」という問いが全ての講演で共通して重要だった。何のために共創しなければならないのか。
白木氏は志を元に動いたというお話だった。大学にはそのために必要なデータがあったということだが。

白木 起業の際、大学で学んだことは大きかった。業界を説得する材料に大学で得た数字、データが大事だった。大学で得た知識は全く無駄でなかった。これらに基づいて当社が先んじて展開した SDGs 的な取り組みは、今日の様々な企業が企業アピールとして当然に取り組んでいることであり、意義はあったと感じている。

小林 大学の役割をどう定義するか。カセム氏は、現在の大学は評論家型すぎるのではというご指摘だった。白木氏は、シンクタンク的な存在の大学に言及された。
それらに関連する会場からの質問が来ている。「カセム氏の講演にあったような産学共創により大学の公共性が保てるのか心配である」というもの。大学が企業と共創すれば、知財を保護しなくてはならなくなり、世界の大学と議論することも、新興国や国内に技術を自由に提供することも出来なくなるのではないかと問うている。

カセム 志を共通に認めると、功利主義的な問題は出てこない。皆が、これによって社会が良くなる、ということに燃えることが重要。知財をどうするかは悩ましいが、私は知財を自分が持たないことにしている。すると楽だった。知財を守ることで時間を無駄にしている。知財は得意な企業人を信用して人に任せる。このためには、みんな一緒になる接着剤が必要であり、接着剤は人間性である。それは自分の心を豊かにするのに求めなければならない。功利主義を超えて機会を与えられるか、志が高いところに意義を与えられるか、ということだと思う。

小林 公共性に関しては、平田氏が豊岡の大学は観光・文化に責任を持つとお話された。大学の公共性においては微妙なバランスになると思うが、この責任とはどのようなニュアンスか。

平田 知財で言うと、著作権保護が TPP で死後 50 年から 70 年に延長した。劇作家としては出来るだけ上演してもらいたいのでそれは長すぎると考える一方、ソ連初期は完全に著作権が無かったため、作家は作品を作らなくなった。ある程度競争が無いと作家は作品を作らなくなってしまう。このように知財・著作権は普遍的なものではなく、ましてこれからのデジタルの時代、全ての情報が人類の共有財産化されてしまう現在では、今までの感覚では無理だろう。

質問への回答としては、戦後日本は教育委員会の独立性が強かった。しかし現在の地方は極端な少子化となっていて、教育政策は教育委員会だけでは任せられなくなった。都会でも公私立で生徒の偏重が起こり、これは教育委員会だけでは対応不能であり、政策が関与しなければならない。例えば医学部は大学病院を持っており、地域医療に責任を持つ。教育の独立も大切だし、公共性も大事であるが、公共性の意味が変わってきているということを前提として大学を考えなければならないというのが自分のスタンスである。

カセム 先進諸国が新興国に知財を持っていくという考えが間違っている。知財を新興国向けにカスタマイズする中でブレークスルーが生まれる。これが新しい価値を生むが、そういうことには大学は得意でないので、経団連のような信頼性のあるパートナー企業とやっていくのがいい。日本国内の大企業と小さな企業の間でも同じ問題が生まれ、信頼関係が重要である。

小林 梶原氏、大学の公共性について何かありますか。

梶原 知財をやっている頃はひたすら守る、守るだった。しかし現在はオープンイノベーシ

ョンの時代であり、知財の在り方は変わってきていて、画一的ではない。それぞれのパネリストが考える知財のエリアも違い、政策含め十把一絡げの話ではないと思う。実際は個々に向き合い、日本的な「三方良し」を貫くのが良い。

小林 会場からの質問で、「大学の事業をはじめ、日常生活の全てにコスパを持ち出す人が増えています、どうにかならないでしょうか」、というものがありました。松尾氏からお願いします。

松尾 余裕と時間と無駄の積み重ねが人生の楽しみと思う。コスパを心のパフォーマンスと考えるべき。文科省の中でも、笑顔を忘れないようにしたい、という話をしている。笑顔になれる仕事が良く、笑うから楽しいのである。そのために評価の軸を多様にしていく。大学も論文評価だけでなく、学生をどう笑顔にしたか、どんな人材を育成したか、失敗をどう活かしたか、等を評価していく。

迫田 いくつかの評価軸が必要だが、コスパを考えないのも良くないと思う。日本が弱くなったところも、一つには製品にコスパを意識しなかったことにある。例えば、「アマゾンで買えるもので出来ないとイノベーションではない」、という考えがある。そのようにコスパの感覚無くしては、これまでのプロダクトアウト型のやり方を続けてしまうだろう。

小林 コスパにはある種の浄化作用があるということですね。技術者・研究者の暴走を現実に戻す力がある。

白木 経営者としてコスパは常に考えるが、自分の会社は現地を見たり工房に行ったり、業界の人から見ればコスパが悪い。しかしそこに介在するロマンや人間らしいことを、モノづくりをする者として大事にしたい。環境問題などはコスパを考えると出来ない。

梶原 コスパをやることはやるし、やらないことはやらない。自分が何を重視し、判断するかが大切。自分とは違うことを一旦受け入れて、違うならやらないで良いのではないかな。

平田 フランスは20代後半から芸術監督に予算を与えて劇場を運営させ、将来的にトップになるエリートを時間をかけて育てていく。日本はそれをせず、いきなり学長などのトップになってしまう。本来は日本も20代後半くらいから育てなければならない。

カセム コスパというものが、一つのバウンダリーコンディションを設定するものだと考える。時系列で変わるものなので、所与のものと考えてその時々で判断すれば良い。ただコストについては、お金や時間、パフォーマンスとしては感動、満足等、複数の指標で見るのが良い。複数の指標で満足出来れば社会的にやった方が良いのではないかな。

小林 ありがとうございます。大学もコスパで見る有力官庁がある中で、この質問があったので気になった次第です。全体としてバランスよく見る必要があるが、コスパが有効に機能する面もあるというお話であったかと思います。
皆さま、最後に一言ずつお願いしたい。

カセム 発想豊かなものが出てきたときに、広めるために中立のインターフェースが必要である。これがないと産学共創を本格的に活かせず、これをどうやって作っていくかが課題。

平田 冒険もアートもイノベーションも新しいものを作るもの。しかし目新しいと、新しいは違う。センスがあるものは、やってみせられると追随したくなる。感動を伴わないとイノベーションにならない。感動を作るような大学を作りたいと考えている。

梶原 社内ではダイバーシティワークフォース、インクルーシブカルチャーと言っているが、多様な人たちが認め合って、産学が対話を進めてより良い世の中にしていくのが重要。若い人たちがワクワク出来るような環境を整えていかななくてはならないので、是非、皆さんと一緒に夢のある日本にしたいと思う。

白木 大学で学んだことが役に立つのか疑問に思う学生も多いと思うが、自分は大学のことを役立てる形で起業出来たことが改めて認識できたし、学生たちに伝えていきたい。

迫田 大事なことは、課題をちゃんと見つけて、どういう未来を作っていきたいか。社会、企業、個人がどうやって一本に繋がるか。自分の悩みから繋がるもので、社会がどう変わっていくか。どういう課題と向き合うかを産学で思考していけば、新たな世界が広がると感じている。

松尾 生きるにあたって、ワクワク感と幸せ感が重要。そのために産学官プラットフォームが重要と考える。人生100年時代にあたって、大学を含めた地域をプラットフォームにする時、何度も学べるプラットフォームが必要である。これは今の大学では無理

であり、大学・企業・自治体と一緒にしなければならぬ。このために、言葉だけではなく人の流動化が重要と考える。

小林 本日は産学対等に人材について議論するという問題意識から始まって、全ての課題を解決するという訳にはいかないものの、様々な知見が得られた。産業界としては、ビジネス目標を社会目標にしていくことが真剣に課題としていることが、大学サイドとしてもよく理解できた。また、大学も in society から for society となることが問われていることを受け止めた。

全体総括は山極会長にお譲りするが、最後に、本登壇者全員が大学の卒業者であることに鑑み、大学の人材育成は成功しているということを伝えてパネルを閉じたいと思います。本日はありがとうございました。

5. 全体総括と閉会挨拶（山極壽一 日本学術会議会長、京都大学総長）

- ・今回は産学の問題を話し合った前回シンポジウムとは違う内容で、本質的な話が出来たと思う。
- ・カセム氏の講演は、大学のでたらめさを企業と連携すると面白いという意見だった。そういうものを中立的なプラットフォームに乗せて創造性豊かな旅をしましょうという呼びかけだった。産学で理解しあうのは重要だが、まさにこのようなスタンスをしっかり持ちたいと思った。
- ・平田氏の講演は、世界から人を迎え入れるための国際化、というのが印象に残った。日本を国際化の舞台にするという提言だと思う。日本から世界の人々を呼び込んで課題を解決し、一緒に地球を良くしていく。そこに地域創生の鍵が眠っている。そのためには文化政策における水平分業を行わなければならないが、出来ていない。文化はこま切れではない。総合的な視野が必要であると改めて思った。
- ・梶原氏の講演は、デジタル化時代に居るという問題意識から、守・破・離という日本の暗黙知を創造性に繋げると良いのではないかという提言であった。これはまさに私も考えていることで、産業界も大学の方を向いてくれているのだと感じて心強く思った。
- ・大学は面白いこと、多様性が出てくる場所でないといけない。思いついたことが出てくる場所でなければいけない。学生が海外に行って、異文化理解とは、異文化であるということを理解することであると分かった、ということがあった。これと同様、産業界と大学も、大学に居る個人も、それぞれ違うことをやっているという理解から始めた方が良い。だからこそ連携も出来るし、違うものを持ち寄って新しいものを創造できる。
- ・日本の大学や産業がだめだ、だめだと言っていては、低く見られ、搾取の対象になってしまう。もっと自信を持って強みを結集し、世界の先頭に立つことを意識すべきではないか。そして、先頭に立つなら世界を考えて動くという意識をもつべきではないか。その意識にSDGsは有用である。

- ・SDG s は政治、行政、産業、利益を考えない大学等がプラットフォームで繋がる際、良い目標になる。そこで新たな知を呼び起こし、実装すれば、研究者としても本望になる。自分が気付かない自身の研究の SDG s との関連性を、ビジネスマン、行政マンに見つけてもらうのも良いのではないかと思う。
- ・今の若者の人生観は大きく変わっていて、複線的な人生観を持っている。若者たちは色々なところで能力を発揮していくことを望んでいる。その力を開放してあげられるようなプラットフォームをいくつも作ることが、学术界と産業界が協力して出来ることではないか。平田氏は新たに作る大学がその主役になることを語り、カセム氏はそのプラットフォームに言及し、梶原氏は企業がその受け皿になることを示唆して下さったように思う。
- ・本日のような対話を繰り返しながら、学术界と産業界がどういう形で強みを発揮出来るか考えていきたい。

以上

日本学術会議主催 学術フォーラム
「産学共創の視点から考える人材育成」

アンケート調査結果

※ 複数回答可

来場者

	申込み数	参加者	参加率
事前	215	158	73.5%
当日		10	
報道			
合計	215	168	

登壇者 10

アンケート結果

回答総数	81	回答率	48.2%
------	----	-----	-------

1.性別		2.年齢層		3.住まい	
男	55	20歳未満	0	東京	43
女	23	20～29歳	5	埼玉	6
無回答	3	30～39歳	8	千葉	4
		40～49歳	10	神奈川	16
		50～59歳	28	茨城	0
		60歳以上	28	上記以外	10
		無回答	2	無回答	2

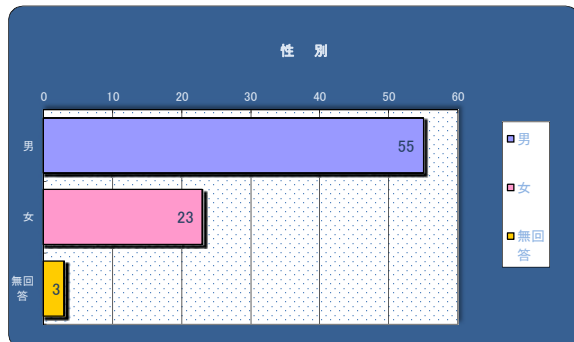
4.勤務地		5.職業等		6.専門分野	
東京	59	会社員	38	自然科学	32
埼玉	2	自営業	2	社会科学	17
千葉	1	公務員	5	人文科学	3
神奈川	5	団体職員	8	その他	16
茨城	0	大学教職員	21	無回答	16
その他	11	小中高校職員	0		
無回答	3	学生・生徒	1		
		その他	4		
		無回答	3		

1.講演会を知った経緯 ※		2.今までの参加		3.内容について	
所属団体からの案内	28	ある	42	大変良かった	54
日学からの案内	43	ない	38	まあまあ良かった	23
新聞・雑誌	0	無回答	1	あまり良くなかった	2
友人・知人	5			まったく良くなかった	1
その他	9			無回答	1
無回答	0				

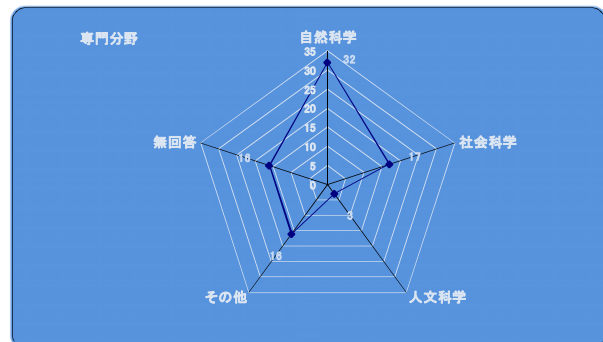
6. 今後、日学がこの問題を更に議論す講演会を開催したら参加したいか	
参加する	61
参加しない	0
わからない	15
無回答	5

平成31年4月19日開催 日本学術会議主催 学術フォーラム
「危機に瀕する学術情報の現状とその将来 Part2」
アンケート集計結果

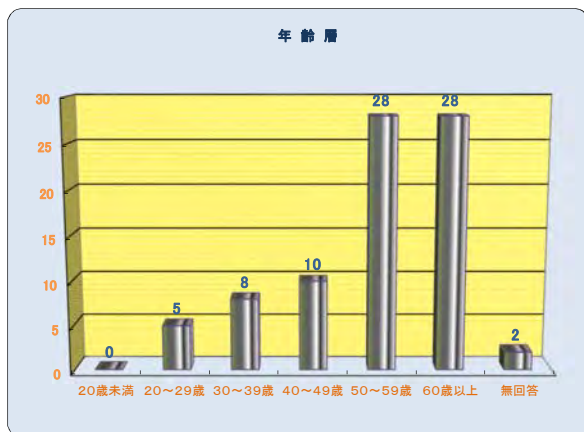
性別



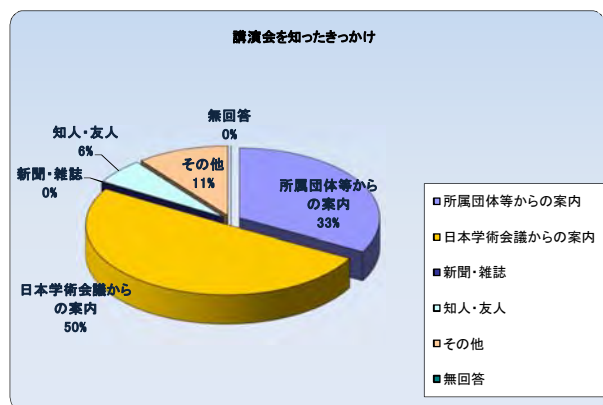
専門分野



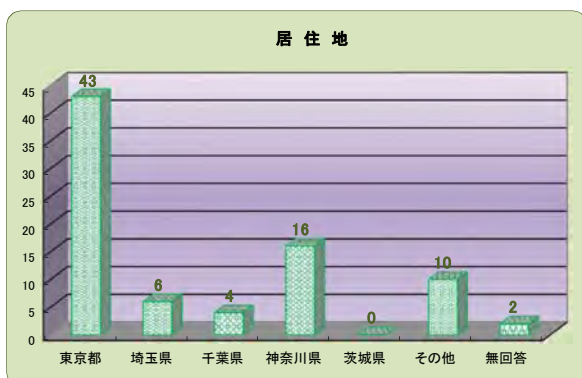
年齢層



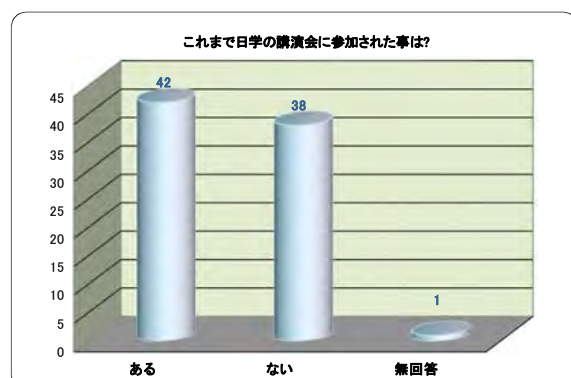
講演会を知ったきっかけ



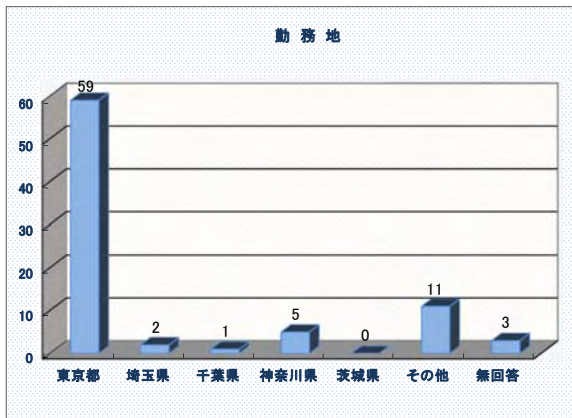
居住地



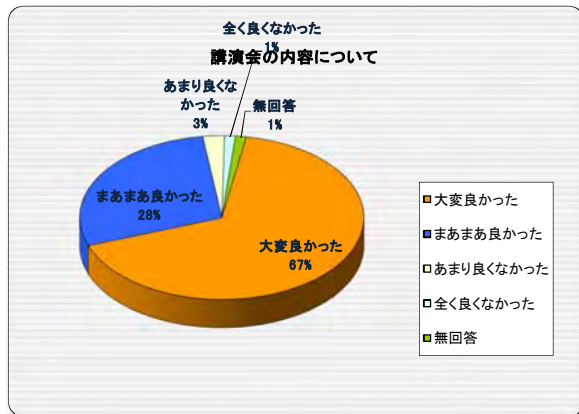
今まで参加された事は



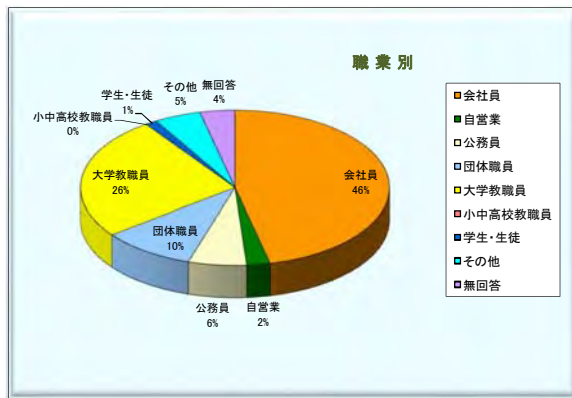
勤務地



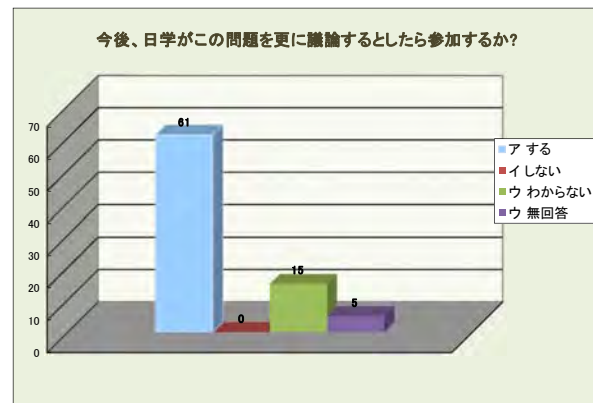
講演会の内容について



職業別



今後も参加する?



No.	設問5) 今回実施のフォーラムについて	設問7) 今後学術フォーラムで取り上げてほしいテーマについて	設問8) その他気づいた点
1	産学を大局的に横断したフォーラムで、大変なになりました。ありがとうございました。	人間教区。発想を豊かにするにはどうすればいいか。産学同席の対話の場	どんな方々がご参加されているのが気になりました。
2	途中参加ですが、パネル討論はとでも有意義でした。特にカセムさんの提言は素晴らしい。	SNS、クラウド時代のアカデミズムの在り方	質問紙もよいが、TwitterやQRコードを利用して質問を受けては？また、内容が良いので、期間限定で良いので動画配信すべきである。
3	3月7日のフォーラムで出ていた「トップ同士は合意できているように見えるけど、現場レベルでは共創や人材マッチングがなかなかうまくいかない」という点について、現場レベルでの葛藤やそれを乗り越えた例等が知りたかった。今回の内容は、先進例を知ることではしたが、若手研究者のナマの声を聴きたかった。	産学共創に実際に際にかかわっている若手をよんでいただき、人材マッチングや研究活動における障壁や葛藤、それをどう乗り越えたかの体談、さらに大学や企業に求めるサポートなどの要望についてはなしをききたいです。	提言についてだいぶ合意形成と浸透は進んだのでは？これから概念やあるべき論ではなく、提言を実現するにあたって現場レベルの問題点（共創がなかなか進まない障壁(3/7のフォーラムで出した話)）の議論なのではないでしょうか。
4	国際、地域、産業という3つの視点での講演者を選んでいただいたのが良かった	大学教育の在り方をさらに掘り下げてほしいです	初めての参加でしたが、とても良かったと思います(やはり、芸術関連の有力な方のお話は必須だと思います)
5	今般の人材育成という産官学共通の悩みを共有できる貴重な機会であったと思います	平田先生がパネルで提言されていた、大学、研究機関の管理職の計画的育成について、大学院や企業での育成を交えてのクローズアップはいいかでしょうか？	また参加させていただこうと思います
6	リカレント系の話題もあってよかったですと感じました。(経産省の社会人基礎力のことも含めて)インド人学生の実態が面白いわゆる”若者論”だったのが、少し残念だった	IoT時代の国際協力、国際政治関連／Z世代、みれにある世代の実情、社会とのかかわり方	パネルディスカッション都債、もう少し明るい良かった
7	平田オリザ氏の観光論、そこに大学がかかわるという視点、話しぶり、素晴らしいと思いました	若手研究者の育成について	山極総長のお話、興味深かったです。
8	言葉のフレーズ(少子高齢化、イノベーションなど)にまつわりついた固定観念やイメージを払しょくする柔軟性の必要性を感じた。(1)新興国をTestBaselに。(2)共同体を強める学力	民話とは何か。	新しい視点を獲得の企画ありがとうございます。コスバは大学にはある程度は必要だが、プライスレスなものが求められていると思う。
9	・人を大切にすることを重要視することが内需の落ち込みを起こした	外需と内需の関係、高度成長の原因分析	日本がc**t**ばっかし考え、米国のbusiness施行、欧州のISO.academ**指向で、遅れ始めている
10	世のため人のため人から必要とされる人間、人の役に立つ人間、その基礎を作る大学教育であれ	企業が求める学生「人間力」「自立する立派な日本人」を育成する大学教育	企業にとって必要な専門知識は入社してから企業が行う人間の基、根づきができにくい学生は使い物にならない
11	どれも空回りしそう	組織の「からまわり」について	wifiと混線とをお願いしたい
12	大学は研究と教育を区別できる体制にし、両方ともレベルアップを徹底する。 徹底的に飛び級を実行する(セーフティネットは当然準備しておく) B2B2Cの最終顧客のニーズを***考えるべし(産学官で言うニーズはCのものではなくなん中のBです)	「日本では、どの程度自由に発想できる場になっているか？」その後の制約となっているFactorsは何か？考えてみましょう ・日本発のSDGしやどうあるべきか(国連発ではない)	・産学の字は大学のみでしょうか？→高校、中学、小学、幼児保育園、親(保護者)の教育は大丈夫なんでしょうか？ ・日本発だけでなく、中立な立場をとるグローバルな視点で考えるべきと考えます。 ・大学発のベンチャーは東京(百歩ゆずって少数大)に集中して較差が大きくなっている→灯台方式を構築できない？ ・生の世界を経験し、実践の裏付けをできないと、境界条件だけの理論だけではFactorsが無制限ある上の世界では役に立たないことがほとんどだと思います。できればグローバルなビジネスオペレーションを経験し、腕を磨く必要があります
13	アカデミックにはもつと財務省の緊縮財政と闘ってほしい	大学の株式会社化	
14	とても有意義な時間を過ごせました	教育評価、SDGと教育	
15	楽しく聞かせていただきました。人材育成との関連がもう少し適格だとありがたかった。誰のための人材育成か。社会のため？企業のため？他人のため？	あるべきデジタル社会	
16	コスバの議論について思うことは、かつて”自分たちの〇〇”だったものが、”利用しているサービス機関の1つ”になってしまったものが多くように感じある。例えば”大学”	発達障害とダイバーシティ、特にアクティブラーニング、共創プロジェクトへの参画について。また発達障害の上司を持った時、どう対応すべきか	
17	様々な視点で人材育成を見つめられた。産学官だけでなく、国際、地域創生、AIといった分野にもバリエーションがあり、参考となった。	女性のキャリア形成への新たな見解	

No.	設問5) 今回実施のフォーラムについて	設問7) 今後学術フォーラムで取り上げてほしいテーマについて	設問8) その他気づいた点
18	想定とは異なる観点、話題での講演を聞くことができ、非常に参考となった。人材育成というテーマの幅広さ・裾野の広さを改めて実感した。	産学間の人材流動性について 科学技術イノベーション政策の在り方について	
19	昭和30年代の学校教育のゴールは一流企業などに人材することを目指す人材を育ててきた。そのため「地元から離れふるさどには戻ってこない人材になった」という分析に共感しました。		生のオリザ氏と生の山極氏の話が聞けた
20	大学が社会とどうつながっていくのか、新しい視点を見つけた。地方に夢を与える方法についてアイデアをいただいた		
21	大学も企業も問題意識は若手に投資する、というのは正しいと思う	広大接続、特に人材育成(STEM)について	資料・データが暗い、4upで見えにくかったため、HP等でupいただけるとありがたい
22	スピーカー、パネリストの切り口の視点がシンクロナさそうで絡んでいたところが面白い	人文科学分野での産学連携の在り方、欧米の実例に学ぶというテーマで	
23	遠いのでなかなか参加できないが、関心はあります	やはり人材育成が大事	
24		1. 企業の研究者あるいは研究所と大学の役割分担をどのように考えているのか？目的の違いは？双方が出口戦略にこだわると、多様性と長期的競争力が失われぬか？ 2. 経団連は大学に対して博士人材を求めているのですか？官僚も企業も優秀な人材を大卒又はマスター卒で採用して、留学させたり博士号と取らせている。学生も任期付き研究者よりも企業に就職した方が生活が安定するし、テニアンが取れるとは限らず、勉強が仕事に直結するので、企業就職を望む研究職に残っても文科学の競争的研究資金が得られる分野の研究をせざるを得ず、好きな研究ができない。就職して企業からテーマを与えられるのと変わりない。 3. 産学共創において、大学の公共性は保たれるのか？(1)特許があるのですべてのデータを公開して世界の学会で議論することができない(2)特定の企業から委託研究を受けた場合、税金も使って研究しているにも関わらず、その成果を競合企業に提供できなくなる	「産学共創」とすると大学の企業研究所化が進み、出口戦略に結びつかない研究や学問の研究者は研究資金を得られず、多様性が失われ、10年～20年後の日本の競争力が著しく失われる可能性があるのではないか？ 企業にとっではもはや自前で研究所を持つ余裕がない。研究者一人を雇う金を大学に委託研究費として与えて、その研究室を自社の研究所のように使えば安上がりだ。独立法人化した大学にとっても委託研究費はありがたいがwim-wimの関係だが、はたしてそれでいいのか？
25	国際感覚のある先生方のお話は、日本の産学官の取り組みに欠落している点を浮き彫りにして、大変興味深かった。	人材育成について、議論で止まってしまうことも多いため、さらなる一歩に向けた議論を試みてはどうでしょうか	
26	「対等な対話」、人材育成、若者への着目、地域再生、大変面白い着眼点でお聞きすることができました。「人を育てる」という点で多くの共通点があることを再認識しました。		講演された3人の方のレジュメは配布していただきたいと思います。女性の参加が少ないのが少々残念です。
27	モンテセム氏と白木夏子氏の理解のレベルが違すぎて、大事な論点がわかれたように感じる。途上国は「かわいそう」ではない。SDGsはかわいそうな人を救う取り組みではない。		どの営利団体にも政府にも所屬せず、自由に企画できる学術会議ならではの企画をお願いします
28	あまり産学共創的ではない話でした。個々の話はそれない面白かったが。		梶原さんのスライドが欲しかった
29	人口減少時代の人材育成は極めて重要。AI化がなされてもコントリールする人材の必要性は不変	雇用政策とリンクした人材の育成やItto化	
30		アメリカおよびシンガポールの高等教育、欧米／アジアのビジネススクール教育	
31	出演者の話は興味深く、よい刺激になりました。	人材育成	
32			
33	梶原さんのおっしゃっていることはとても理想的で、現実の日本企業を表していないように思えて、本質が見えにくくなってしまったようで残念		

No.	設問5) 今回実施のフォーラムについて	設問7) 今後学術フォーラムで取り上げてほしいテーマについて	設問8) その他気づいた点
34		オープンサイエンス、国際共同研究	
35	多様性に富んだ登壇者から発信される共通のメッセージ。考えさせられるもの、学ぶことが多かった。		
36		みれにある世代、Z世代と交わられる機会(意見交換)があればよいのでは？	
37	「おもろい」人材育成に期待します		
38	「産学共創の視点」を知りたくて参加したが、産学官の方が、パネリストである以上のことは理解できなかった。(参加前は、産学の溝の解消策や理想的な産学協力による教育についての議論を期待していました)		
39	地方創生や人材育成については、若者とそれ以上の世代の間の温度差ないし持っている意識・ビジョンの差を感じます。育成する側と育成される側が議論する場を設けてもよいように思いました。私自身は3.11時に大学1年でしたが、まじめであるのではなく、まじめにならなければ生き延びられないという意識を強く持っています。		
40		Society5.0/超スマート社会	
41	地域課題に取り組む大学教育(開学)を目指している平田オリザ氏の考え方や熱意に心を打たれました		
42	ハネルの時、途中から人材育成のテーマと少しずれている議論になってしまったことは少し残念です		
43	震災を経験した学生の価値観に言及された平田先生のコメントが印象的でした。若い時に”志”を考えた、その後、何をやる人になるか、産学でも見守りたいと思った		
44		地方創生	
45	産学共創を同じテーブルについて考えていくという形で進められていることに大変興味を持っています。前回フォーラムともに大変参加になりました。		
46	産学官合同での開催は良いことと思うので、このような機会は増やすべき		
47	学の領域が旧来よりどんどん広がっているのを感じるが、産はどんどん狭まっているように思われ、相乗効果が期待できるかどうか疑問		
48	大学で教授をしているが、産業界&行政側のアプローチが少ない		